

若月正吾教授『道元禪とその周辺』の公刊に寄せて

青 龍 宗 二

若月教授は多年の研究成果をまとめて、去る七月山喜房仏書林から『道元禪とその周辺』と題する一書を刊行されたことは、同じ分野を専攻する者の一人として、誠に喜ばしい限りであると共に、研究者に益するところ甚だ大きいと思われる。

曹洞宗における道元禪師研究、引いては宗学研究の本格的な歩みは大正時代から昭和にかけてのことであり、現在に至るまで半世紀以上の長きにわたるが、本書はこの宗学研究の歴史に焦点を当てて、特に「昭和前期における道元禪師研究の動向を宗内外の両面から考察することによって、その研究成果を整理・評価すると共に、宗学そのものの本来的な在り方を究明する」ことにあった。従来、道元禪師研究の動向・回顧を試みる研究は、すでに鏡島寛之氏⁽¹⁾をはじめとして、いくつかの論文も知られているが、本書は諸研究の内容に深く立ち入って、批判・評価し、体系的に位置づける学的作業の先鞭をつけたところに特色が存するのである。いわば宗学研

究史の研究の第一歩を築かれたわけである。

一般に批判的研究はややもすると批判のための批判に終わる独善主義に陥りがちであるが、著者は十二分に宗学に精通している上からの批判分析であるため、そこには独善的な臭みは一片もなく、却って著者の意図する先学の研究成果を媒介しながら、宗学研究の一段の進歩を期待しようとする願いが遺憾なく発揮されているといえよう。

内容の詳細なる紹介は省略するが、本書は前編と後編との二部から構成されおり、その前編においては特に宗門内の宗学研究の在り方を追究し、後編には全く宗門とは関係のない在野の哲学者や科学者の道元禪師研究に注目して、その研究内容や宗学研究に与えた影響などを詳細に論じられている。

前編における宗内の道元禪師研究については一宗学研究者の論文を対象としているが、今少し代表的宗学者の研究成果をも同時に分析的メスを加えたならば、その歴史的評価も一段

と深みを増したと思われるが、それはともかくとして、著者が対象とする一宗学研究者とは、著者が青松寺時代から駒沢大学にかけて永く随従していた筆者の亡父・青龍虎法であり、宗学関係に関する代表的な論文三篇がその考察の対象とされている。著者は次のように述べられている。

具体的には青龍虎法師の宗学関係論攷の分析・評価であっても、同時にそれは昭和前期における道元禪師研究の動向や、その特質を客観化し、歴史化して把握することが意図されている。

前編・第一章は、その第一の論文『道元禪師の宗教における本質の様相』を考察したもので、そこで力説される三昧主義ともいうべき主張を踏えて、さらに宗学研究の本質にまで迫ろうとしたものである。

前編・第二章は、その第二の論文『道元禪師の宗教における体系的組織について』を考察したもので、第一章で禪師の宗教の本質が解明されたのに引き続いて、つぎに宗学体系や組織の面を他教學との関連において明らかにした。

禪師の思想は、坐禪三昧を中心とする独自の特質を持つが、それが他の仏教教學からどのような距離にあるのか、その全体的な位置づけが明確にならないと、客観的評価を得られない。従って第一章における禪師の宗教の本質の解明と、第二章における体系的組織化は、表裏の關係にあり両者相俟って道元禪師研究は充足されているのである。

前編・第三章は、その第三の論文『本覚思想と修証論の種々相』を考察したものである。如上の第一、第二章において、その目差

す宗学の内容と輪廓が明らかになったのを踏えて、これが實際上の問題に、すなわち本覚思想をとおして修証論に適用したのが本章で、そこでは教學組織を綿密に論じながら、しかも独自の性格を有するその修証論を究明することに努めた。

と、以上が上記の三論文を吟味するに当たっての把握の姿勢であるが、その内容を精究すると共に宗学そのものの真髓へ迫ろうとされているのである。

後編においては、昭和前期の道元禪研究が宗外の人達によってどのように研究され、その成果が宗学研究の上に如何に影響されているかなどいくつかの問題を論究した上で、更に宗学側の受容度をも考察の対象として筆を進めているが、かかる研究は戦前から幾分なされているものの、その多くは単に宗外者が自己の研究に道元禪師の思想を利用して研究であるとか、単なる哲学的な宗教研究があるという冷酷な批判的論述が見られるに過ぎない。しかし、著者は宗我見の立場を離れて、宗外者の道元禪師研究の成果を客観的に評価し、その時代の宗学研究に及ぼした影響などを正当に受け止めていることは大いに注目し得ることである。

宗外の道元禪師研究者は、周く知られる和辻哲郎、秋山範二、田辺元、橋田邦彦の四氏であり、日本を代表する哲学者や科学者であって、諸氏の道元禪師研究業績についても、宗学者であれば一往は誰でも承知していることであるが、著者

は前記四氏の取り扱いについて、

後編・第一章が、如上の四氏の中で、特に大部の業績を出している秋山範二氏の、主著ともいふべき『道元の研究』の検討に当てられるのは容易に理解し得るであらう。『道元の研究』が、いわゆる「周辺」の研究の中心となるのは、何人も異論のないところで、そこで試みられた西田哲学的、ないし当時流行した現象学的研究方法が、いかに同時代の宗学研究に影響を及ぼしたかは、測り知れないものがある。そこで、前編において考究した青龍論文をはじめ同時代の宗学関係論攷と対比しながら、とくに宗学側の受容度を具体的に考察したのが第一章の骨子となっている。

後編・第二章においては、さらに遡及して昭和初年における道元禅師研究の草分けともいふべき和辻哲郎氏の『沙門道元』の再評価を試みるに至った。和辻氏によって、日本精神史研究の途上発掘された『沙門道元』を発端として、昭和前期の道元禅師研究は開花するのであるが、ほぼ半世紀を経た今日、宗内外からの総合的評価をなすべき好機と考へての所論である。和辻氏の『沙門道元』には、のちの「周辺」の研究が持つ、あまりに哲学的、論理的な窮屈さがなく、文化史的立場からひろく道元禅師を理解したよい面があり、昭和前期の「周辺」研究のよき基調をなしたことは俾いであつたと思われる。

後編・第三章は、あまりに厳密な哲学的研究ともいえる田辺元氏の『正法眼蔵の哲学私観』の考察である。

秋山氏の『道元の研究』に比して、百頁前後の小著であるが、田辺氏は、当時のわが国哲学界の大宗をなした、かの西田哲学の後継者と目されていたから、その反響はまことに大なるものがある。

若月正吾教授『道元禅とその周辺』の公刊に寄せて（青龍）

った。

小著であるため、殆んどその全文を挙げて吟味検討した。おそらく今日『正法眼蔵の哲学私観』を読むひとはあるまい、との老婆心からである。

後編・第四章は、科学者として著名な橋田邦彦氏の『眼蔵』研究の一端に触れたものである。周知のように氏には大著『正法眼蔵釈意』があり、その全様は論ずべきもないが、やはり昭和前期の「周辺」の研究として省くことができない。わずかにその一面をうかがつたにすぎぬが、『行としての科学』を附け加えた次第である。

以上の前・後編をもって、本論文製作の主旨はほとんど達せられたと思うのであるが、昭和前期の道元禅研究は、そのまま昭和後期の、すなわち現在の道元禅研究へと連関して来なければならぬ。戦後の宗学研究については、また人もあろうし、論題の範囲を超えることにもなるので言及しないが、戦前のそれを論じたからには大いに関心を有するところである。

と結び、これをもって本書の目的とする研究を見事に完成させていることに深く敬意するものである。

ただ、こゝで、筆者の亡父虎法論文について、一言補足しておきたいと思う。本書で論じられている如く、亡父のライフワークは「道元禅師の宗教思想の体系的研究」であるが、その概要を学会で発表したのは昭和十五年十月十七日、京都での日本仏教会である。そのテーマが本書に論じられている『道元禅師の宗教思想の体系的組織に就て』の論題である。

が、この発表は宗の内外に反響を呼び起こしたのである。宗内からは雑誌『道元』の編集者より、この発表を聞き得なかった本誌読者のためにとの要望に基づいて、『道元』十一月にやや内容を新たに同一のタイトルで執筆しているが、更に学内においても、要請に依えて大学主催や学生主催の宗学大会に再三にわたり上記の論題において発表している。このような反響は、当時の曹洞宗学界において、道元禪に関する体系的研究がなお地に着いていなかった事情のあることは否定できないほどに体系的研究が立ち遅れていた時代である。現代における宗学研究の現況とは隔世の感がある。

それはともあれ、亡父のこの論文の中には体系的に研究すべき研究項目が一往含まれているのである。それは、序論、行判論、三昧論、存在論（法界論）、修証論、仏陀論などであるが、著者が取り上げた『道元禪師の宗教における本質の様相』は三昧論研究の一部であり、『本覚思想と修証論の種々相』なる論文は修証論研究の序説に過ぎない。この外、発表未発表論文を含めると、なお五十篇ほどがあるが、何れも各研究項目に対応する一部であり、全体の十分の一にも満たない論文であるので、如何に体系的研究が至難の業であるかが分るのである。

今一つ指摘しておくならば、和辻博士の主張である。博士は人も知る門外漢の立場から文化史的に道元禪師研究の先鞭

をつけられた最初の人であるが、『沙門道元』の序言に「道元の真理そのものについて、自分の解釈が唯一の解釈であると主張するわけでない。しかし少なくともここに新しい解釈の道を開いたという事は言つてよいであろう。それによつて道元は、一宗の道元ではなくして人類の道元になる。宗祖道元でなくして我々の道元になる。」と高調されるが、博士の所論に首肯されないものがある。一例を挙げれば、

後者（筆者註・道元）戒律による力強い自己鍛錬を力説する。この意味で道元は「煩惱即菩提」の思想のうちに生活と理想との或る調和を造り出していた日本の仏教へ、再びあの原始的「あれかこれか」を力強く引き戻したのである。（道徳への関心⁽³⁾）

という解釈は、道元禪師を戒律主義者として原始仏教へ逆転した立場にあると見ていることである。

今後、宗学研究を推し進めてゆく上で、常に注意すべきことは、著者が指摘される如く「道元禪師研究は、特に昭和前期において多くの成果を挙げ、今日高く評価されている。それらは現在の宗学研究のかけがえない重要な基層を成すものであり、その再吟味、再評価は今日必須の研究課題」といつてよからう。

註

(1) 鑽仰会編『道元禪師研究三六四頁以下、(2) 和辻哲郎『日本精神史研究』一六〇頁、(3) 前掲書二〇四頁